

乾田直播栽培による飼料用稲の生産技術体系

飼料用稲生産では秋の収穫作業とあわせて、育苗、移植等の春作業の労働ピークの緩和が必要となります。そこで、省力、低コスト技術として期待される乾田条播直播栽培を用いて、倒伏させずに多収を得る飼料用稲の生産体系（図1）を確立しました。

☆ 技術の概要

1. 飼料用稲「クサノホシ」の乾田条播直播栽培では、春期に牛ふん堆肥を施用します。また、基肥として被覆尿素肥料（LPS-40 と LPS-120 の 1 : 1 混合）を播種と同時に播種溝に施用します（窒素成分で約 7 kg/10a）。
2. 雑草防除には、出芽直前に非選択性除草剤（グリホサート）、入水までに選択性除草剤（シハロホップブチル等）を 1, 2 回、入水後に初中期剤をそれぞれ散布します。
3. 苗立数は 50 本/m²程度を目標とし、播種量は乾籾で 2.0~2.4 kg/10a とします。
4. 鳥取県岩美町の現地試験圃場での収量は、5 年間の平均で 11.3 ロールベール/10a で、岩美町の飼料用稲の平均収量よりも、平均で 26%程度高い値です（図2）。
5. 10a あたりの労働時間は、移植栽培の 17.5 時間に対して乾田条播では 10 時間となり、大幅な労働時間の削減が可能となります。

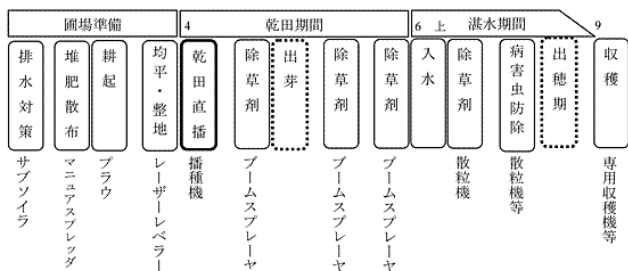


図1 「クサノホシ」の乾田直播栽培体系

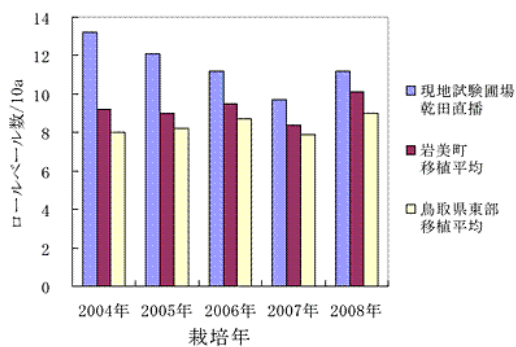


図2 鳥取県岩美町試験圃場での収量 (鳥取県畜産農協調査)

☆ 活用面での留意点

1. 温暖地で、ディスク駆動式不耕起播種機(M社 NSV-600B)を用いた場合の情報である。
2. 詳細は「飼料用稲生産技術マニュアル」、「飼料用稲の生産・利用による耕畜連携に向けて」を参照されたい (http://wenarc.naro.affrc.go.jp/tech-i/tech_index.)。
3. 堆肥の適施用量は堆肥の種類や土壌により異なるため、稲の生育に応じて調節する。
4. 詳細は近中四農研・中山間耕畜連携・水田輪作研究チーム(電話 084-923-5354)へお問い合わせ下さい。

(中央農業総合研究センター 研究管理監 寺島一男)